第3章
結合価の必須成分

3.1 はじめに

結合価とは狭義的にある述語の実現に欠かせない必須成分の数のことであから、これを研究するには、当然ながら必須成分の内容いかんを徹底的に問う必要がある。本章では、述語とくに動詞述語の必須成分とは何かという問題を提起し、先学のいわゆる必須成分の中味、特に石綿の「結合価表」(注1)を再検討し、「意図」動詞の実現において、結合価の一つに数えられる「第5形引用文」という必須成分が持たれることを考察してみる。

3.2 必須成分とは何か

述語の語彙性格いかんによって、結合価のタイプが左右される。かくて、述語にとって必須成分とは何かという素朴な問題提起がどうしても必要である。もちろん、結合価に限らず、どの語学の研究でも、これは避けて通れないものと考えてもよかろう。現に一つの述語が成立するのに必要な条件は何かという論究が多くなされていることはこの事実を裏付けてくれる。術語の相違こそあれ、内容そのものは大差ないと思われる。例えば、寺村(1982:51)は状況についての知識による助けということが全くない条件の下で、あるコトの表現において、言い換えれば、ある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるものを「必須補語」と定義した。石綿(1983:226)は「必須成分」の代わりに「格成分」を用い、さらにこの考え方の流れを受け継いで発展させた益岡(1992:3)は、この「格成分」を「価」とし、これと「副詞的補足語」を組み合わせたものを「補足成分」と命名した。一方、「必須補語」、「格成分」という用語を使わないにしても、ヴントの内的限定格という用語に従って、「主格・対格・与格が関係の自閉的な一世界を構成する」という川端

(1986)もいる。そして、必須成分の格の具体化として、細かい所まで検討する必要があるにせよ、諸家に共通するものは「が」「に」「を」格と名詞が組み合わさったものと認めてもいい。ただ、本章では、三つの格の形だけにこだわらず、寺村の定義に則った「必須補語」ないし「準必須補語」も、動詞にとっての必須成分という意味で使った。

実際、寺村の「ナル」類と「変エル」類の「準必須補語」を要する動詞と、石綿氏の結合価表に出る動詞を突き合わせると、両者の間に多少のずれがあるのに気付く。例えば「分かれる」「まとめる」「上がる」「落ちる」「決まる」「上げる」「下げる」「塗る」などの「準必須補語」の「に格」記述は、石綿の結合価表において詳細になされているが、これに反して、「伸びる」「ちぢむ」「増える」「かたまる」「発展する」「増やす」「減らす」「ちぢめる」「暖める」「暖まる」「割れる」「裂く」などの「に格」記述は石綿の結合価表から抜けている。こうしたことは、必須・随意の区別をやめて、現象的に動詞の述語実現においてどんな成分が持たれるかを記述すればいいという考え方(注2)にもつながっている。しかし、意味論的に、ある「動詞」たとえば「勉強する」にとっての必須成分は、「人間」「抽象概念」の二つの名詞と「が格」、「を格」の二つの助詞が組み合わさったものと考えても、研究上有効であろう。

3.3 必須成分の問題点

上述した益岡の「補足成分」のうち「副詞的補足語」を詳しく観察すると、一つの問題点に気付いた。つまり、益岡は「副詞的補足語」の下位分類として「連用語」と「引用語」を立てるとしている。立て方自身はさておき、「連用語」には異論をはさむ余地はないかと思う。まず益岡の挙例を参照されたい。

・当時大学のことを象牙の塔といったが……。
・彼は、中国の儒教を、いつわりの道と考え……。

つまり、名詞と助詞「と」が組み合わさったものを「引用語」(注3)と命名したのを受けて、益岡はこれらの文にあっては補足成分として機能しており、述語「いった」と「考える」(注4)にとって不可欠の成分であると指摘した。従来の研究では充分に扱われてこなかった「引用語」の考察においては、この点を高く評価してもいいが、石綿は決してこの点をおろそかにするのではないということに注目されたい。例えば「言う」と「考える」の結合価

を以下に記述している。

・言う　N[hum]が＋ N[abs]を＋ N[hum]に＋ V
　　N[hum]が＋ N[hum]に＋ Sと＋ V
・考える　N[hum]が＋ Sと＋ V
　　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V

注意すべきは、すでに前述したが、「この表は用言の数、調査対象としたデータ等の偏りもあるので、汎用的とは言い難い」と石綿が述べている点である。しかし、記述分類に当たっては、必須成分と思われる「言う」の「引用文」、「考える」の「引用文」と「引用語」はきちんと述べてある。「言う」に関しては「引用語」が欠落しているように見えるが、これはデータ等の不備によるものと考えられる。実際「言う」とほぼ同じ意味に使われる以下の「言明する」の結合価を見ても、おのずから納得できる。

・言明する　N[hum]が＋ N[abs]を＋ N[abs]と＋ V
・称する　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V

また、「考える」の結合価とほとんど同じ「判断する」の例も参考になる。

・判断する　N[hum]が＋ N[abs]を＋ V
　　N[hum]が＋ Sと＋ V
　　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V

これらの動詞ばかりでなく、「思う」「感じる」「見える」「見なす」「見る」「きめる」「認める」「呼ぶ」などの認識動詞ないし命名動詞は、必須成分と感じられるものである「引用語」をほぼ揃えること(注５)に注目されたい。

・思う　N[hum]が＋ N[div]を＋ V
　　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V
・感じる　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V

・見える　N[con]が＋ N[hum]に＋ V
　　N[con]が＋ N[loc]に＋ V
　　N[con]が＋ N[con]に＋ N[hum]に＋ V
　　N[con]が＋ N[con]と＋ N[hum]に＋ V
・見なす　N[hum]が＋ N[div]と＋ N[div]と＋ V
・見る　N[hum]が＋ N[abs]と＋ V
　　N[hum]が＋ N[con]を＋ V
　　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V
・きめる　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]に＋ V
　　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V
・認める　N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V
・呼ぶ　N[hum]が＋ N[hum]を＋ V
　　N[hum]が＋ N[hum]を＋ N[abs]と＋ V
　　N[hum]が＋ N[hum]を＋ N[hum]と＋ V

一方、この結合価表には問題点が全くないというわけでもない。ここで「に格」に焦点を絞って、問題提起の一つとする。「に」は動作主自身が移動した結果、存在する場所が動作主の動作を受ける対象物の存在場所を表すのが本義であろう(注6)。もちろん、「縛る」「結ぶ」「揃える」「抱く」「持つ」などの動詞に限って、奥田(1983)の言うような接触のための道具を示す場合は「で」の代わりに「に」を使い得るし、また「濡れる」「震える」などの動詞が、現象の意味を表す「に格」名詞と組み合わされると、原因的な意味を獲得しうる。ここでは意味の論究ないし名詞の意味特徴に深く立ち入る余裕はないので、現象的に「に」格を伴う動詞の記述を示すだけに止める。以下、順を追って、石綿の結合価表の動詞結合価を筆者の引用したものと比較対照してみることによって、この表の補うべき所の一端を捉え得るだろう。なお、番号は石綿の表によるものとする。

6.あえぐ N[hum]が＋ V

①重荷にあえぎながら、山の頂上にたどり着いたときの満足感が登山のだいご味。(国語)

②四十六年度といえば、……いわゆる円切り不況にあえいだ一年間だった。(学研)

45.余る N[div]に＋ V

①大きな車にも余る位、黄金が一山出てきたのです。(杜子)

②あの人は八十に余る高齢なのに、七十歳代にしか見えない。(国語)

46.表す N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①今年の夏休みには、朝・昼・晩の三回、温度計を計ってグラフに表し、結果をまとめてみよう。(国語)

②うちの祖父は、喜怒哀楽の感情をめったに顔に表しません。(国語)

69.生きる N[hum]が＋ V

①社会に生きるわたしたち人間はいつもの世にも、その時代とともに生きてきた。(国語)

②サード前のゆるい当たりがかえって幸運で、なんとか一塁に生きることができる。(国語)

75.急ぐ N[hum]が＋ N[act]を＋ V

①彼女はデートに急いだ。(会話)

②彼は学校へ急いだ。(和英)

92.要る N[hum]が＋ V

①その旅行にどれだけ金が要るのか。(小学)

②食事を、飢えをしのぐだけのものにしないためには、料理にいろいろと工夫が要るものです。(国語)

118.うながす N[hum]が＋ N[act]を＋ V

①彼は父に、早く行こうと促した。(アン)

②特にこの点を忘れやすいので、諸君には注意を促しておく。(国語)

120.生まれる N[hum]が＋ V

N[con]が＋ V

①ああ、男に生まれて損した、女に生まれてりゃよかった。(国語)

②学内に新しい委員会が生まれた。(小学)

222.輝く N[con]が＋ V

①結婚式の日、花嫁の顔は、あふれる喜びに輝いてしまいました。(国語)

②夜空に星がちかちか輝いていた。(高校)

229.固める N[hum]が＋ N[loc]を＋ V

①皆それぞれ、得物に身を固めて……(偸盗)

②荷物は部屋のすみに固めて置いておきました。(国語)

264.かなう N[hum]が＋ V

①厳しい母の眼鏡にかなうようなお嫁さんはそうないでしょう。(国語)

②私は商業学校の時から剣道も二段で主将をしていたが、軍隊でおぼえたこの人の剣にはかなわなかった。(小銃)

272.かまう N[hum]が＋ N[hum]を＋ V

①急ぐなら、わたしに構わないで先に行ってちょうだい。(国語)

②「今から見ればあまりな早婚だけれども、昔は其様なことには些しも構わなかった。」(武蔵山)

290.感じる N[hum]が＋ N[div]を＋ N[div]と＋ V

①新しい仕事を始めるという友人の意気に感じて、わたしも一役買うことにした。(国語)

②彼の熱弁にも聴衆はなにも感じなかった。(小学)

299.聞こえる N[con]が＋ V

①彼はうでのいい大工として世に聞こえていた。(例解)

②うぬぼれに聞こえるかもしれないが、それは私にしかできないと思う。(会話)

301.きざむ N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①山の木に名前を刻む登山者が多くなってきた。(会話)

②妻の額にはも匿すことの出来ない、苦渋を現す皺が深く刻まれていた。(天使)

327.着る N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①ちょっと寒いようだから、シャツの上にセーターを着ていこう。(国語)

②あの男は、権力をかさに着て、弱い者いじめをしている。(国語)

353.暮れる N[temp]が＋ V

①漁の一日は雨に暮れたが。(潮騒)

②彼は口に出してくどいて、いつまでも一人涙に暮れていた。(海神)

413.叫ぶ N[hum]が＋ V

①マラソンのレースを間近に見て、ぼくはすごいなあと、心に叫んだ。(国語)

448.失敗する N[act]が＋ V

①伯父さんが事業に失敗したので……(波)

②ブラジルでの事業に失敗し、男は多くの借金を抱えて帰国した。(国語)

455.忍ぶ N[hum]が＋ N[abs]を＋ V

①わたしは物陰に忍んで、彼の帰りをじっと待っていた。(国語)

②谷あいの村を囲むあらゆる林と草原に、息をひそめて忍ぶ外国兵がみちあふれ……(飼育)

456.しばる N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①下着とかいて紐に縛ったボール箱から……(流れ)

492.しるす N[hum]が＋ N[abs]を＋ V

①偉大な業績を残した彼の名は、永久に歴史の上に記されることだろう。(国語)

②私は、日陰者としての第一歩を、路上に記したわけである。(てん)

507.透かす N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①洞くつに入ってきた人の顔を、外に明るい光に透かして見ると、死んだと思っていた船長だった。(国語)

②お酒の入った茶色のびんを明かりに透かして、残りの量を見た。(国語)

518.進める N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①ここでは、単に文学論にとどまらず、作者の人生観にまで論が進められる。(国語)

②四代の奥方に仕え、表使格に進められ、隠居して終身二人扶持をもらうことになった。(じい)

552.増加する N[div]が＋ V

N[hum]が＋ N[con]を＋ V

N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①この駅の利用者数は二年間で三倍近くにも増加した。(国語)

566.そびえる N[con]が＋ V

①折崖の松の下には、鵜の糞に染まった白い岩角がそびえ……(潮騒)

②お城の天守が遙に森の中にそびえている。(平凡)

567.染める N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①この仕事に手を染めたのは今からちょうど十年前のことである。(国語)

②叢立ち急ぐ嵐雲は、炉に投げ入れられた紫のような光に燃えて、山懐ろの雪までも透明な藤色に染めてしまう。(生ま)

570.そろえる N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①新しいコーナーには、外国製のバッグをはじめ商品が豊富にそろえられていた。(国語)

②……少しもせいた気持ちなどもなく、手鏡に髪をそろえる。(流れ)

592.抱く N[hum]が＋ N[con]を＋ V

N[hum]が＋ N[hum]を＋ V

①彼女は赤ん坊を胸に抱いた。(アン)

②……片手に彼女の首を抱きながら、片手に彼女のほおをさすっていた。(歯車)

594.たくわえる N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①ダムに蓄えられた水は発電や農地のかんがい、上水道などに利用する。(国語)

②いつも眼の中に思想を蓄えてると云う様な顔付きをしていた。(木乃)

607.たたむ N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①今日の老人にも、ひとり胸に畳んだ悩みがある様子だった。(森と)

②様々の蝶が、……花々に羽を畳みながら、庭を横切った。(武蔵大)

608.だまる N[hum]が＋ V

①彼は親に黙って旅に出た。(会話)

②彼の暴言にはとても黙っていられなかった。(国語)

629.頼る N[hum]が＋ N[hum]を＋ V

①金も勢力もないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。(野分)

②私ども夫婦は、老後を子供に頼るつもりはこれっぽっちもありません。(国語)

662.つかれる N[ani]が＋ V

①奥さんが入院したため、小さな子の世話で、先生はこのところ生活に疲れてみたい顔をしている。(国語)

②お繁の方はひどく旅に疲れた様子で、母の背中に頭をせかけたまま、気ぬけしたような目付をしていた。(家)

663.尽きる N[hum]が＋ V

①彼女の性格は明朗の一語に尽きる。(国語)

②その話は大抵自分の夫と十四になるひとり息子に対する愚痴に尽きていた。(深夜)

667.継ぐ N[hum]が＋ N[abs]を＋ V

①三月の開通に間に合うよう、工事は夜を日に継いで進められた。(国語)

②そんな木に竹を接いだようなことを言われても納得できない。(国語)

668.尽くす N[hum]が＋ N[abs]を＋ V

①彼女はよく母に尽くした。(高校)

②私はあの手紙の一行一行に狡智の限りを尽くしてみたのです。(斜陽)

676.続く N[act]が＋ V

N[con]が＋ V

①子供が犬にかまれて死傷するという事件がこのところ各地に続いている。(アン)

②六年生の後に続いて、小さな花を持ったかわいい一年生が入場してきました。(国語)

688.つぶる N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①度重なるぼくの失敗にも、父は黙って目をつぶっていてくれました。(国語)

②彼は悪いことはどんなことにも目をつぶらない。(和英)

691.つまる N[con]が＋ V

①駒代は早速返事につまってしまった。(腕く)

②煙突にすすがつまった。(和英)

720.照らす N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①あれはこう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ。(野分)

②これまで彼を弟のようにいつくしんで来た心の歴史に照らして、今彼を恋と呼ばれるような気持ちの対象とすることは、この上なく醜く思われた。(武蔵大)

721.展開する N[hum]が＋ N[abs]を＋ V

①車窓に、次々に新しい景色が展開するので、あきることがありません。(国語)

②びょうびょうたる大海が目前に展開した。(小学)

737.通す N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①老眼のおばあさんにとって、針に糸を通すのはとても大変な仕事のようです。(国語)

②この原稿にざっと目を通していただけませんか。(和英)

740.溶かす N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①食塩を水に溶かして、ビーカーの中に入れた。(国語)

②彼は砂糖を水に溶かした。(アン)

741.解く N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①わななく手に紐を解いて、袋からだした仏像を枕もとにすえた。(山椒)

742.溶ける N[con]が＋ V

①コーヒーカップの底に、砂糖が溶けないで残っている。(国語)

②塩は水によく溶ける。(和英)

770.直す N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①漢文を現代文に直す問題が出た。(和英)

②一万円をドルに直すといくらになりますか。(和英)

775.泣く N[hum]が＋ V

①……ともに恋に泣き、世に泣き、運命に泣いた彼は……(妻)

②頂上を目前にして帰ってきたんだが、まったく悪天気には泣かされたよ。(国語)

798.にぎる N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①サーカスの綱渡りや空中ブランコはいつ見ても手に汗を握るスリルがある。(国語)

②戦場で相見える日があれば、掌中に此の人たちの生死を握って、その指揮をとらねばならぬのだ。(雲の)

804.にじむ N[con]が＋ V

①私の額には汗がにじんだ。(海と)

②男の子が泣きながら起き上がると、そのひざには血が赤くにじんでいた。(国語)

823.濡れる N[con]が＋ V

①並木道を雨に濡れながら歩いていった。(ダハ)

②……よこしぶきの雨にびしょぬれに濡れながらも、若い細君のことを考えながら歩いた。(妻)

824.ねがう N[hum]が＋ N[act]を＋ V

①困ったときの神だのみと言われそうだが、兄さんの高校合格を神に願った。(国語)

②田中さんを電話にお願いします。(小学)

827.眠る N[ani]が＋ V

①私の両親は故郷の小さな墓地に眠っています。(会話)

②多数の兵士が海底に眠っている。(小学)

840.のばす N[abs]が＋ N[con]を＋ V

①植物はふつう地面の上に茎を伸ばし、地面の下に根を伸ばしています。(国語)

②きょうできることをあすにのばすな。(和英)

841.のびる N[con]が＋ V

①挑戦者はチャンピオンの一撃でマットの上にのびてしまった。(国語)

②そうして頸に伸びている、銀のような白い鬢……(国語)

848.生える N[con]が＋ V

①芽をだすに都合よく暖めると、すぐに泥に黴が生えた。(伸子)

②庭に雑草が生えだした。(和英)

849.映える N[con]が + V

①初夏の昼の光が代赭色の傾斜いっぱいに流れて、……煙草は、濃い影を落として く赭すんだ艶々しさに映えて美しかった。(生活)

②汽車の窓から見た島々は、夕日に映えてとても美しかった。(国語)

893.はやる N[div]が + V

①大統領を撃ったのは血気にはやる一部の青年将校たちであった。(国語)

②これをもって実行にはやる友人等を非難し、……。(平凡)

895.はらむ N[hum]が + N[hum]を + V

①船は順風を帆にはらませて、ぐんぐんと海原を進んでいった。(国語)

②空はオレンジ色を内に含んだ涙ぐましい灰色をして、……(飼育)

896.はる N[hum]が + N[con]を + V

①春になると、この林にサーカスがきて、広場にテントを張った。(国語)

②母は、寝る前には用心のため、いつもバケツに水を張っておく。(国語)

937.広がる N[abs]が + V

①一つの想念が急に彼女の心に広がり出していたからだ。(菜穂)

②恰も明方の寒い光が次第に暗の中に広がるよう暗中不思議に朗らかな気持ちで る。(枯野)

938.広げる N[hum]が + N[abs]を + V

①机の上に阿部ミツの託した日章旗を広げた。(海と)

②やがてとどけられたお弁当、お座敷に広げて御持参のウィスキィをお飲みになり、… …(斜陽)

939.広まる N[abs]が + V

①彼の英雄的な行為のうわさはたちまち国じゅうに広まった。(和英)

②夏の夜空に、鮮やかに大輪の花火が広がった。(国語)

940.ふえる N[div]が＋ V

①三日間の大雨で、神田川の水かさはいつもの倍以上に増えていた。(国語)

②石炭にかわって、石油の需要が何十倍にも増えた。(国語)

968.振る N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①頭を横に振って靴下を又はこうとした。(アメ)

②順番がわからなくならないように、用紙のすみに番号をふっておきなさい。(国語)

971.ふるえる N[con]が＋ V

①お母さまのお声は怒りに震えていた。(斜陽)

②娘の顔をただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸が震えたほどだった。(雪国)

979.減る N[abs]が＋ V

N[div]が＋ V

①この十年間で、村の人口は当時の三分の二以下に減ってしまった。(国語)

990.吠える N[ani]が＋ V

①うちの犬が見知らぬ人に吠えている。(アン)

②嵐は樹に吠え、窓に鳴って惨まじく荒れ狂って居る。(愛と)

1012.待つ N[hum]が＋ N[hum]を＋ V

①彼らの活躍にまつところが大きい。(和英)

②私が成功するか否かは彼の努力にまつところが大きい。(和英)

1023.まわす N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①回覧板は早目に次の家に回してください。(国語)

②この品物はここでは不要なので、どう欲しいところに回してください。(国語)

1024.まわる N[con]が＋ V

①おやじの背中に回って手術衣の紐を結んでやっていた。(海と)

②おとなしい説明役に回ろうとするＨ氏の話を、……(森と)

1060.燃える N[con]が＋ V

①彼らの胸中には炎々たる政治の理想が燃えていた。(てん)

②男は怒りに燃える目を上げて、盗賊の首領をにらみつけた。(国語)

1078.焼く N[hum]が＋ N[con]を＋ V

①その肩も背もさんざん野良仕事に焼かれている近在からの湯治客……(銀心)

②姉は海水浴に行って体じゅうを日に焼き、真っ黒になって帰ってきた。(国語)

1081.焼ける N[con]が＋ V

①人並みに日に焼けた、その細い、痩せた手足……(おは)

②引き裂けた白いカーテンの色が次第に陽に焼けていくのがハッキリわかったが。(海と)

1091.破れる N[con]＋ V

①知子との恋愛に破れた後、南の島で結婚していた涼太が……(あふ)

②人を恋して、その恋に破れるのも、貴重な経験ですよ。(国語)

1107.ゆるす N[hum]が＋ N[act]を＋ V

①権利のないものに存在を許すのは実業家の御慈悲である。(野分)

②江戸時代、幕府は西欧諸国ではオランダにだけ貿易を許していた。(国語)

1109.ゆれる N[con]が＋ V

①白い花がそよ風に揺れ、その周りをちょうが飛び回っている。(国語)

②ただ夜になると、板びさしの下に真赤なれい堤灯がともされ、遠くから見ると、それが

狐火のように海風に揺れていた。(人間)

1117.よごれる N[con]が + V

①子供たちは一日中遊び回り、夕方に帰ることには、顔も手足も、背中までも泥に汚れている。(国語)

1124.よみがえる N[ani]が + V

①記念碑が立てられ、村を守った男の名が再び人々の心によみがえってきた。(国語)

②この書を読んでいくうちに、うち沈んでいたわたしの心に希望がよみがえってきた。(国語)

1143.わかれる N[abs]が + V

①社会はいくつかの階層に分かれている。(小学)

②昆虫の体は、頭、胸、腹の三つの部分に分かれる。(国語)

1152.割る N[hum]が + N[con]を + V

N[hum]が + N[nmn]を + N[nmn]で + V

①さして広くもない部屋をついたて様のもので二つに割り……(広場)

②その夜、私はアルコールに水を割ってひとり痛飲した。(桜島)

1154.割れる N[con]が + V

①世界が二つに割れてこうして戦争をしていても、……(雲の)

②緞子帷が二つに割れてすると肩をすべって背後で一つになって了うと、……(少年)

3.4 意図動詞の必須成分

まず、吉田(1971)(注7)のあげた例文を参照されたい。

・秋ももはや終わろうとしている。(如何)

・それ[踏絵]を、今私はこの足で踏もうとする。(沈黙)

吉田によれば、右の文は、「秋ももはや終わろう」「私はこの足で踏もう」というように、外形上は一旦「う」で切れ、下接の「とする」「としている」で、さらに上文の引用あるいは一種の説明となっており、「う(よう)」「と」「する」三語それぞれの意味が組み合わさって、「う(よう)とする」全体を一語の助動詞に準ずるものとして、動作・現象など実現しかかっている〈刹那の状態〉すなわち〈将然態〉を表し、「う(よう)とする」の主語が非情物の前文の「う」は推量の意味に使われるのに対し、主語が有情語の後文の「う」は上接の「意志動詞」と相俟って、意志の意味に用いられるという。つまり、ここでの「する」は一種の不完全動詞で、形式化して強調・陳述の作用をなしていると氏は付け加えた。

一方、意志を示す〈将然態〉たる「う(よう)する」は、例えば次の文のように、少々意味の違いこそあれ、すべて「う(よう)と思う」に置き換えられることが分かると吉田は指摘した。

(1)米子がしぶしぶ床を敷いて、不二子を寝かせようとする。(流れ)
(2)ゆるぎない決心のもと、新たな研究にとりかかろうとしている。(国語)
(3)この一年間だけ離れた即いたりして、何かいつも肉体的に心情的に不一致の点を残し、近づこうとしては、再び遠ざかっていた。(暗い)
(4)夜更けてから窓の外の林を渡る風の音も、眠りに入ろうとする夢に交じって、その時まで桃子を嘆息させた思いからはいくらか遠ざからせたようであった。(三人)

注意すべきは構文的に「うとする」の「する」は「と思う」と違って、一種の助動詞であることである。次の吉田の挙例を見られたい。

・「さてベースボールを聞いて来っと。」(瀬戸)

吉田によれば、上のよう文末の「と」は終助詞化したもので、元来この文の上下に「私は～と思う」の形式があるべきものである。論理的には、主語と述語との消去の形式であるという。

つまり、「私は～とする」の形式ではなく、「私は～と思う」としている見解は、「思う」類の動詞述語の実現において、単なる「が格」と、もう一つの必須成分たる「第5形引用文」(筆者が仮に名付ける)とが持たれること、そして「第5形引用文」と「思う」類の動詞とのつながりが「とする」よりもかなりルーズであること、この二つの点から言って、後述する証拠と

相俟って非常に有益である。

思うに、「思う」(注8)と同様に意志と決心を表す「思い立つ」「決心する」「企む」「誓う」「努力する」などの動詞はすべて「必須成分」か「随意成分」を挟むことによって、「う(よう)と」との緊密な関係をくずすことも可能である。次の例文を参照されたい。

(5)結婚しようとどうして思い立つのか。(新和)

(6)妹娘は逃げようと色々考えていました。(しち)

(7)彼女は体の不自由な人のために一生をささげようと固く決心した。(現代)

(8)泣いている妹を笑わせようと、僕は一生懸命(注9)だった。(国語)

(9)彼らは王位をくつがえそうと共同で企んだ。(アン)

(10)何事にも協力していこうと固く誓った仲間に、みごとに裏切られた。(国語)

(11)彼は再び繁子に近づくまい(注10)と心に誓って居た。(桜の)

(12)彼らはそれを土曜日までに仕上げようと、できるだけ努力した。(小学)

(13)討論の中心的地位を占めようと彼は努力している。(現代)

(14)わたしは彼を救おうといっしょうけんめいに努めた。(アン)

(15)文化祭を成功させようとあれこれ気を使い、(注 11)すっかり、神経をすり減らした。(国語)

つまり、例えば「一人の娘が髪を結おうと思った」(髪)のような構文では「髪を結う」の「推量意向形」が「と」助詞と組み合わさったもの、つまり筆者が言うところの「第5形引用文」(注 12)たる「髪を結おうと」は述語「思う」にとっての必須成分の一つと考えなければならない。次章で述べるように「〜しようと」自体は範疇素性の〈副詞〉に属する。

そして、この種の必須成分たる「第5形引用文」は、意図活動(注 13)の判断作用によってたつ対象だが、もう一歩沈潜化して、思考や知識から抽出された知的対象に転ずれば、多くの場合、形式名詞「コト」でしめくくられる文に置き換えられる。やや長くなるが、上述した例文は次のように書き直される。

(16)結婚することをどうして思い立つのか。

(17)妹娘は逃げることを色々考えていました。

(18)彼女は体の不自由な人のために一生をささげることに固く決心した。

(19)泣いている妹を笑わせることに、ぼくは一生懸命だった。
(20)彼らは王位をくつがえすことを共同で企んだ。
(21)何事にも協力していくことを固く誓った仲間に、みごと裏切られた。
(22)彼は再び繁子に近づかないことを心に誓って居た。
(23)彼はそれを土曜日までには上げることにできるだけ努力した。
(24)討論の中心的地位を占めることに彼は努めた。
(25)わたしは彼を救うことにいっしょうけんめいに努力している。
(26)文化祭を成功させることにあれこれ気を使い、すっかり神経をすり減らした。
(27)一人の娘が髪を結うことを思った。

また、予想したとおり、「コト文」は一歩進んで、凝縮化した動作性の抽象名詞に発展し得ることが分かるし、また「第5形引用文」は当然ながら、益岡のいわゆる「引用語」の持つ副詞の性格を持っており、「こう」「このように」「そう」「そのように」などの副詞的要素によって置き換えられることも可能である。前述した例文をいくつか示すと次の通りである。

(28)結婚のことをどうして思い立つのか。
(29)どうしてそう思い立つのか。
(30)彼らは王位打倒を共同で企んだ。
(31)彼らは共同でこのように企んだ。
(32)協力を固く誓った仲間にみごとに裏切られた。
(33)そう固く誓った仲間にみごと裏切られた。
(34)討論の中心的地位の獲得に彼は努力している。
(35)彼はそう努力している。
(36)私は彼の救出にいっしょうけんめいに努めた。
(37)わたしはこのようにいっしょうけんめいに努めた。
(38)一人の娘が髪結いを思った。
(39)一人の娘がそう思った。

今までの論究を、最初の動詞「思い立つ」を次のように整理すれば、一層はっきりするだろう。

彼はどうして結婚しようと思い立ったのか
→彼はどうして結婚することを思い立ったのか
→彼はどうして結婚のことを思い立ったのか
→彼はどうしてそう思い立ったのか

本章では、ある種の動詞の実現において、もう一つの必須成分すなわち「と」助詞付きの「第5形引用文」が持たれることを指摘した。以下、こういった動詞は意味的にどんなまとまりのある類型を示すかを考察したいと思う。

既存の研究がとかく看過しがちだったもう一つの必須成分である「第5形引用文」の存在を考察してきた。当然ながら、この種の「第5形引用文」と組み合わさった動詞は何かという問題提起が決して無駄でないことは自明の理である。これらの動詞は、よく観察すると、人間の意志活動というより、もっと下位分類化した意図活動を示す「意図動詞」と定義した方が適当であろう。なぜならば、こういった「意図動詞」の実現において、意図活動の動作たる人間と、動作性の抽象名詞あるいはその一歩手前の(刹那状態)の「第5形引用文」を対象とするものが必ず持たれるからだ。くだけて言えば、意図動詞構文は誰かが意図的に何かをする行為を表す構文であり、しかも、ほとんどが二つの必須成分(注 14)を要するだけである。そして、この構文は、「誰が」は「が格」、「何を」は「を」、「に」、「と」のいずれかの格を取る。かくて、対象たるものが多様な格を持ち得る事実には川端(1986)のいわゆる一種の格の連絡(注 15)が見られる。

一方、このグループの動詞に入る目安は多くの場合、「と」を取る「第5形引用文」の有無にかかわる。逆に言えば、「第5形引用文」を有する動詞は「意図動詞」と言ってもいい。例えば、上述した「思い立つ」「決心する」「誓う」「努力する」「努める」「思う」などの動詞と、次の例文に出てくる「焦る」(注 16)「意図する」「考える」「企てる」「計画する」「決意する」「志す」「試みる」「誘う」「企む」「目指す」「もがく」「目論む」「心を配る」「迷う」「工夫する」「うかがう」「決める」「思い定める」「などの動詞は意味的にこのグループの例をなす。参考のために前節で述べた動詞「思う」「決心する」「努める」などの例文も多少加えておく。次の用例を参照されたい。

(40)是が非にもこの間に駒代を説き伏せてしまおうと焦っている。(腕く)

(41)沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦る度にぶくぶく沈む様に……(吾輩)

(42)彼は損を取り返そうと焦った。(新和)

(43)彼は新しい仕事を始めようと意図している。(アン)

(44)私は何とか理由をつけて、この役目から放免されようと思った。(晩夏)

(45)畢竟倦まないというのは、勝とう勝とうと思う励みのあることを言うのであろう。(青年)

(46)これから定子に会いに言ってよそながら別れを惜もうと思っていた其の心組みさえ物優しかった。(或る)

(47)義母との関係を、義母を相手に二人だけで結末を付けようと考えているから、手が付かないのだ。(菩提)

(48)私が進まうか止さうかと考えて、兎も角も翌日迄待たうと決心したのは土曜日の晩でした。(ここ)

(49)ブルツエフの提訴も、……テロリスト全部を傷付けようと企てたもののように感じられるから、……(地霊)

(50)彼らはいかだで太平洋を横断しようと計画した。(アン)

(51)この秋に、クラス会でもやろうかと計画しているところです。(国語)

(52)彼らは自分たちだけでそれをしようと決意した。(新和)

(53)これからの半年間、死にものぐるいで勉強しようと決意した。(国語)

(54)自分でそうしようと決心した以上は、最後までやり通したい。(国語)

(55)人間の達した最後の境を継ごうと志すときに陥いるわれわれの幻想……(信仰)

(56)世間は必ず、此附属物に雷同して他の人格を蹂躙せんと試みる。(野分)

(57)そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を回復しようと試みた。(鼻)

(58)(126)が妥当なのは(中略)聞き手が、しつこく買い物に行こうと誘っているような場合である。(言語)

(59)彼はあなたを陥れようと企んだのだ。(和英)

(60)ある昂揚した刹那には、人は悦んで己を棄てようと誓うだろう。(信仰)

(61)彼女は美しくなろうと努力した。(アン)

(62)最初ちょっと見ただけでは、この提案は全般的な和解を成立させようと目指していることもあって打算を越えた建設的なものに見える。(現代)

(63)来た道を引き返そうともがくことは確かな死につながることをいちはやく悟ったが、その場で雪あらしが止むのを待つことに決めた。(現代)

(64)巣から落ちたひなは起き上がろうともがいて羽をばたつかせている。(国語)

(65)笑わせようと目論で掛ると、怒ったり、丸で反対だ。(三四)

(66)家つき娘であった豊乃は、孫娘の嫁入りを自分の分も重ねて盛大なものにしようと目論んでいたのである。(紀ノ)

(67)彼女は妻としても努めを果たそうと努めた。(アン)

(68)みんなの手前、泣くまいと努めたが、あふれる涙をどうすることもできなかった。(国語)

(69)この著者は常に客観的であろうと心を配っている。(ロワ)

(70)花の先へよせた皺と眼尻に讃えた筋肉のたるみとが、笑ってしまおうか、しまうまいかと迷っているらしい。(国語)

(71)そして、逆におもしろい略称を作ろうと工夫しているうちに、その新しい提案なり政策なりの、全体の構成や考え方が、うまくまとまってくるということもあるらしい。(発表)

(72)目当てのものを手に入れようとうかがう。(学研)

(73)この客に保険をかけさせようと決めても相手のことわり文句に同調していたら、保険加入の目的は達成されない。(サラ)

(74)あれもいおうこれも言おうと欲張りすぎて、話にけりがつかなくなり、聞き手は、この人何を言いたいのかと、首をかしげることになってしまう。(発表)

(75)正面から切り出して女の心持ちをきこうと思い定めたのである。(ひか)

(76)一切を打ち明けてしまおうと、観念のほぞを固めた矢先、……(他人)

(77)其時候は生涯此事に一身を委ねようと大決心をした。(齋藤)

(78)彼女はしゅうとめを喜ばせようと一生懸命だった。(小学)

今まで述べた「第5形引用文」は、もっぱら肯定的意志という意味に使われてきたが、実際の動詞「努める」の例文(68)と「迷う」の例文(70)を見ると、否定的意味に用いられる助動詞「まい」によって置き換えられることが分かるし、動詞「考える」の例文(48)では、「進まう」「止さう」という相反する意味のペアが使用されていることから、当然ながら助動詞「まい」の使用可能が予想される。もう一度、吉田のあげた例文を参照されたい。

・少なくとも、今やっている研究が完成するまでは、一切の人間的愛情に溺れまいと心に決していた。(木石)
・もう飲むまいと決心したくなるけど、失敗をやったと、後悔していたのである。(銀座)
・健三はそれで、出来る丈不快の顔を二人に見せまいと力めた。(道草)
・私はこの喜びを誰にも気どられまいと自分に誓った。(若い)
・いざ三沢の住院となれば、其位な手数は厭ふまいと、昨日既に覚悟を決めた所であった。(行人)
・地画家が見た恭吾の動かない姿勢と強い物の見詰めようは、この男を対象にして、目を離すまいと固く決意したものであった。(帰郷)
・「先日きりで会はん方がお互いのためにいいと思って、今日は来まいかと思ったんだが、意志が弱くてとうとう伴をするやうに……」(微光)

これらの例文における動詞は、当然ながら、筆者のいわんとする「意図動詞」のグループでなければならぬことは言うまでもない。そして、こういった「第5形引用文」と「意図動詞」はもう一歩進んで、「という」の形によってお互いにしめくくり合う寺村のいわゆる「外の関係」たる連体修飾文、つまり、一種の「意図名詞」(注 17)までに発展し得ることは次の例文を見ても納得できよう。

(79)建設的質問でなく、発表者を図らせようと、発展の内容を陳腐なものにしてしまおうという意図を持った質問には、こちらがあわてたり、真正面からぶつかったりしたのでは、かえって逆効果だ。(発表)
(80)そして、こう答えることで、「この人はなんて頭の中が整理されている人だろう」と、視聴者の関心を引きつけようという狙いなのだ。(発表)
(81)ときには、その発展を混乱させようという下心を持って、意地の悪い質問をしてくる人も中にはいる。(発表)
(82)廊下を走って持参することで、そんなにまで熱心に書類を作成したあと、上役のおぼえをめでたくしようという浅ましい根性なら、許せない。(サラ)
(83)その最前線から、恋人に電話をしようなどという料簡を起こすのはよっぽど現状認識があまいのである。(サラ)

(84)彼は政治家になろうという欲望に燃えていた。(国語)

(85)ユダは、イエスを役人の手に渡そうという陰謀をたくらんでいた。(新約)

(86)江分利の、金網を2倍にしようというアイデアには別の狙いがあった。(江分)

(87)あたりまえのことだが南フランスはヴァカンス旅行に人気があるのに反して、誰もこの国を見物しに行こうなどという気は起こさない。(現代)

また、偶然の一致とは思わないが、寺村のあげたこういった「意図名詞」の例文をも参照されたい。

・ただ受けよう、笑わせようという考えが芸を浅いものにしている。(朝日)

・私はその時心のうちで、初めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の心の中から、ある生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を綴ろうとしたからです。(ここ)

・中日はその後もたびたび悪球に手を出し、得点を逃がした。連敗を逃れようというあせりがこんな結果を生むのだろう。(朝日)

つまり、寺村のあげた三例の名詞「考え」「決心」「あせり」という「意図名詞」は、筆者が前述した「意図動詞」に含まれる「考える」「決心する」「焦る」三語と全く対応している。

本章でのしめくくりとして、「意図動詞」(注 18)の名称を一層浮き彫りにするために、動詞「意図する」を使う筆者の恣意的な例文を通して、今まで述べてきたところを示せば次のようである。

一人の政治家が問題を解決しようと意図していた

→一人の政治家が問題を解決することを意図していた

→一人の政治家がそう意図していた

→一人の政治家が問題を解決しようという意図

3.5 まとめ

以上、本章では必須成分の内容を検討する一方、石綿の動詞の結合価を修正し、今までの研究ではとかく看過されがちだった意図動詞にかかる〈副詞〉の「第5形引用文」が実は結合価の一つに数えられることを論究した。

注:

(注 1)実際、この表は石綿が荻野の協力のもとで作ったものである。全般的考察は第6章に譲る。

(注 2)宮島(1986)では、動詞との共起関係のつよいものを「異型成分」、よわいものを「例外成分」とよび、純粋に量的なちがいを、捕まえようとする所に意味があるとしている。

(注 3)益岡のいわゆる「引用語」は広義的に筆者の引用語「 N と」と引用句「 S'」を包み統べる。

(注 4)実際、動詞「考える」の構文は「思う」とほぼ同じものと考えられる。もちろん両者の間に幾分の相違が見られる。

(注 5)もちろん「引用文」の記述を欠くのが難点と言えよう。実際、多種多様の意味に使われている「思う」一語を徹底的に分析すれば、結合価文法の問題点の多くを解決できると思われる。ここでは「 S 」は引用文、「 S'」は引用句(述語だけ一つを指す)、「 S"」は第5形引用文(後述するように「う(よう)と+意図動詞」)、「N」は必須成分、「 N'」は必須成分に類するもの、例えば、時には副詞「こう」「そう」の類、をそれぞれ示す。名詞の意味特徴を暫く看過して、格だけに注目すれば、動詞「思う」の構文にはおよそ I「 N が S と思う」、II「 N が S"と思う」と二つのタイプがある。

・僕はそうは思わない。(新和英)

そして、この例文「僕はそうとは思わない」は、実際 I「 N が S と思う」II「 N が S"と思う」とに両方とも掛かっている。

(注 6)倉持(1986)の「に」に対する見解は当を得ていると思う。

(注 7)吉田(1971)を詳しく参照されたい。

(注 8)動詞「思う」がさまざまな意味に取れることはすでに上述した通りだが、ここでは特に意志と決心を表す。

(注 9)「一生懸命だ」は名容詞だが、動詞「思う」と同じように「第5形引用文」を取り得る。

(注 10)後述するように、否定的な「第5形引用文」を上接させることも可能である。

(注 11)「気を使う」全体は一語と見なし、「第5形引用文」と結びつき得る。宮地(1982)では、これは相手のために事がうまく(不快感を与えない)ように、細かいところまで配慮するのが本義であるとしていることから「意図動詞」のグループに加わると考えられる。宮地のもう一つの例文を参照されたい。

・一語も無駄を言うまいと気を配っているような説明の仕方だが……。(いの)

こういった慣用句は実際の記述分析においてもどうしても必要であり、さらに2例を加えよう。

①答えを出そうと頭をひねった。(和英)
②再び同じ過ちをすまいとほぞを固めていた。(小学)

(注 12)ここで「第5形引用文」と呼ぶが、多少の語弊があるかもしれない。本来ならば伝統文法に則って「未然形引用文」とすべきだったが、「う(よう)」のほかに「ない」「せる(させる)」「れる(られる)」との意味を取れるし、寺村の「未然」「既然」と山下(1896)の「未然」「已然」などの用語と混同しやすいから、いっそ寺村の「推量意向形」を借用してもいいが、本稿での「意図」の意味を充分に発揮していないので、あえて、従来、筆者が主張している動詞活用表の第5形という用語を使うことにした。この動詞活用表の内容に詳しく立ち入る余裕はないけれども、おおざっぱに言えば、これは寺村の表を五段動詞の順を中心とした活用形式に合わせたものである。第6形のⅠはⅠ類動詞の第6形に「テ」「タ」などが付く時に起こった音便を示す。

つまり、本章ではこの表に沿って、動詞「思う」を上接させるものを V5「第5形引用文」と名付け、「S"」という符号を付けることにした。

(注 13)ここでの「意図活動」は、人間あるいは有情物が意図的に何かしようという心的発露を表す。従って推量の意味が取れる「う(よう)」「まい」はこの「意図活動」に加わらない。ただし、あることをしようかどうか判断に迷う場合は一種の心的発露と認めてもいいから、前述する例文(48)(70)のように「う(よう)か」「まいか」の使用も可能である。次の吉田の挙例を参照されたい。

・「私はまた官員の口でも探そうかと思います。」(浮雲)

・抜かずに置こうかと思案したが、それでもやっぱり心残りである。(山彦)

(注 14)意図動詞の実現において動作は一種の再帰名詞の機能のような役割を果たすものだが、動詞「誓う」の場合は、例えば、「私は同じ誤りを繰り返すまいと心に誓った」(和英)の「心に」を「自分の心に」と見なす。もちろん、こりは寺村のいわゆる「準必須補語」に相当するものと考えられる。

(注 15)川端(1986)に限らず、森田(1985)もこの点に言及している。実際このような例はかなり見受けられる。例えば、ほとんどの辞書では、「黙る」は自動詞に分類されているが、「彼はそのことを黙っていた」(アン)のように他動詞的に使った例もあるし、「泣く」にしても、「に格」の記述欠如が目立つ。ネーティブスピーカーはともかく外国人学習者がとまどうのは必至だ。こうした意味で、ある動詞の実現において必須成分たる名詞の意味特徴の記述は無理だとしても、せめてその「格」の情報をどんどん入れた方がいい。国際交流基金の『基礎日本語学習辞典』は基本語彙の選定がすぐれるし、例文も生きているので、いい評判を得るのも当然だけれども、いくつかの述語、例えば「思う」「考える」「換わる」「甘い」などの「格」記述には、利用する側に立った配慮の跡があまりうかがわれない。この意味では、教育社の『国語基本用例辞典』、学研の『国語大辞典』のような辞書は特に外国人日本語研究者にとって、貴重な資料源と言っても言い過ぎではない。もちろん、国立国語研究所で計画中の『現代語用例辞典』ないし研究社の『英語基本動詞辞典』に相当する日本語の「格辞典」類の出現を期待してやまない。

(注 16)辞書では「ためらう」は自他動詞、「焦る」「もがく」は自動詞として扱われるのが普通だが、「第5形引用文」との直接的結び付きの外に、「第5形引用文」さらに助動詞たる「する」にも上接し得るから、その他の「意図動詞」と比べて、性質をやや異にするだろう。なお「ためらう」は「ヲ格」を取り得るので、「もがく」より意味的に「意図動詞」に近寄っている。なぜならば、上述した通り、「意図動詞」類の動詞の実現において必須成分が二つ持たれるからである。次の例文を参照されたい。

①「いっしょにいかないか。」の誘いに、わたしの返事をためらった。(国語)

②いきさつがすっかり分かるまでは彼の味方につくことをためらった。(和英)
③彼は広間に入ろうとしてちょっとためらった。(小学)
④彼は成功を焦り過ぎた。(国語)
⑤われわれは損害を取り戻そうとして焦る。(アン)
⑥幼児は母親の手を離れようとしてもがいた。(アン)
⑦彼は目的を達しようとしてもがいて居る。(齋藤)

なお、「う(よう)とする」の代わりの、例えば、「木原は…解説風な著述をこの一夏の間にまとめてしまいたいと、あせっているが」(秋の)「その若者はすぐ出発したくて焦っているようだった」(和英)のように、「たい」を使うという事実は一種の連絡対象と言えよう。ただ「もう帰ろうと女を促すが早いか、温泉町の方へ引き返した」(坊っ)「よく旅行に出かけるときになると、なんでも持っていこうと、重そうな荷物を引きずって歩いている人がいる」(発表)の例文などは意図動詞構文に加わらないとしているが、「彼は父に早く行こうと促した」(アン)の如きは、「に格」を取る点では、動詞「誓う」と同じなので、問題提起の一つとしたい。

(注 17)寺村(1977)は次のように言う。「思考・思念の内容は、大いに意志・意向の場合と推測・推量・断定の場合がまず多い。形式的には命令形(陳述度3度)、意向・推量(2度)で表されることが多く、これらの場合には『という』が要求される」。これを受けて、「『思い』『考え』『気』などになると、その内容のところに強い陳述の勢いを盛り込むか、その中のところには単に『コト』だけを表わさせて、陳述の勢いや色合いは、それらにつづく部分で表すか、によって『トイウ』が現れたり現れなかったりする」と寺村は引き続き見解を披露している。これは図らずも筆者のいわんとするところとほぼ一致している。

(注 18)実際、「意図動詞」は本来の意図からして当然ながら、時には「所期の表現」(注 19)ないし「目的表現」を上接させることも可能である。ここにも一種の連絡現象が見られる。もちろん個々たる動詞の語彙的性格に負う所が大いにあるにしても、こういった現象を無視してはいけないと思われる。例えば、動詞「努力する」「努める」の連絡現象は、次の例文からはっきり分かる。

①自分の欠点を直すように努力しなさい。(現代)

②彼は名声を得んがために努力した。(和英)

③武田校長はそう言って、つまずきがちな会議の進行に油をさすようにつとめた。(青銅)

④二度とこんな間違いを繰り返さないように努めた。(小学)

⑤彼は理想を実現するために努めた。(アン)

(注 19)佐治(1984)では、「ように」は「目的表現」と言うよりは、むしろ「所期の表現とでも言った方がいい」としている。